

健康スポーツ実技における授業形態の転換が 学生の授業評価と受講態度に及ぼす影響

柿 山 哲 治 (活水女子大学健康生活学部食生活健康学科)
佐 久 本 稔 (活水女子大学健康生活学部食生活健康学科)

Effects of a change in health and sports lessons on the attitude of students
and their assessment of the class

Tetsuji Kakiyama (Faculty of Wellness Studies, Kwassui Women's College, Japan)
Minoru Sakumoto (Faculty of Wellness Studies, Kwassui Women's College, Japan)

In this study, we examined how students assessed health and sports lessons before and after a change, i.e., the introduction of reporting by students, was made to the class. Report forms were prepared by the author and distributed to students before the start of each lesson. Students were asked to state the goals they wished to achieve in the class, sports experience, and physical strength on the front side, and then answer questions regarding communication and physical skills. They described their physical condition on the day, objectives in the lesson, comments, and their level of physical activity on the back side. It took about ten minutes for them to complete the report, and having to do it before and after each sports lesson was a burden for them. However, students became aware of significant improvements in every aspect of the class. They commented that teachers started to pay more attention to the class environment. Moreover, students themselves developed a more positive attitude towards lessons. By making reports, students were able to set goals in each lesson and clearly recognize their achievement levels. Reading their reports on the class helped teachers revise, improve, and make modifications to lessons while addressing the needs of students. Therefore, we concluded that reporting by students on health and sports lessons not only increased both student and teacher satisfaction in class, but also improved the attitude of some students towards lessons.

I . はじめに

九州地区大学体育連合における春期研修会では、学生にとって魅力ある授業とは何か、教員にとって価値ある授業とは何かについて長年検討が重ねられ¹⁾⁻⁵⁾、最近では宮崎大学の根上優教授が自己実現を促す体育授業のモデル構築として、魅力、価値、挑戦・冒険の三元論的・相互干渉モデルを提唱とともに現実的な授業モデル構築のための方法的規準を示し⁶⁾、この方法的規準に準拠した教材の開発が進められている。

一方、本学では従来より授業最終日に受講学生に調査する授業評価が義務付けられており、その

結果を受けて次年度の授業改善目標を表記したものを公開している。これまで学生による筆者の授業評価は決して悪いものではなく、どちらかといえば学生には満足されているように見受けられた。しかし、筆者自身の中では種目に応じた段階的な指導法が見出せず、常々指導力の未熟さを痛感していた。また、授業評価は、授業の最終日に調査し、その集計結果が戻ってくるのも数ヶ月後であるため、教師自身の来期の授業改善に役立てられても、当事者学生に活かさないという現状があった。

このような背景を受けて、2006年4月より、「学生が満足する授業形態」から「教員も満足できる授業形態」への転換を試みた⁷⁾。授業形態を転換するに当たり、根上教授⁶⁾が提唱している魅力、価値、挑戦・冒険を意識した授業内容を独自に構成し、授業毎に学生の意見や到達度を把握して軌道修正できる情報を得るための記録用紙を考案した⁸⁾。

授業形態の転換を図るに当たり、過去の授業評価で教員の満足度が低くても学生の満足度は高い傾向が得られていたため、教員の満足度が上がれば、バランス的に学生の満足度は抑制されるに違いないという仮説を立てた。なぜならば、学生の授業評価が高い理由の背景には授業が楽しいというものがあり、その背景には技術云々は抜きにして、とにかくゲームがたくさんできれば良いというような風潮が授業中の学生の態度や言動から見受けられたからである。したがって、授業記録を導入し、基本スキル修得のための練習やテスト時間、授業記録への記入時間の確保によりゲーム時間が削減されれば、当然、授業評価を上げる要素が消滅し、低くならざるを得ないという方程式が自身の頭の中で出来上がっていた。しかしながら、自身の中では高い授業評価を得るよりも、自身で満足行く授業を確立することの方が精神衛生上好ましいと考え、授業形態の転換に踏み切った。

Ⅱ．方 法

1．対象

2004年～2007年度の前後期に本学で開講し、筆者担当の健康・スポーツ実技Ⅰの履修者1,497名（2004年508名、2005年319名、2006年310名、2007年360名）を対象とした。

2．授業形態（種目、内容、配慮）

A．2004～2005年度前期までの授業形態

- 1) 形態：学生主導型の授業
- 2) 種目：バドミントン、卓球を全てあるいは半分ずつ入れ替えで行っていた。
- 3) 内容：ストレッチング体操、サービスおよびネットを挟んでのラリー練習を行うが、ほとんどがゲーム中心であった。
- 4) 配慮：学生が飽きずに楽しんでできる授業の展開（ゲーム中心で対戦相手の工夫）を目指した。

B．2005年度後期の授業形態

- 1) 形態：教員主導型の授業
- 2) 種目：多種目を短時間ずつ体験する授業内容（バラエティスポーツ）を設定した。その内容は、形態・体力測定、ソフトバレーボール、バドミントン、ゴルフ、ふうせんバレーボール、卓球を2～4回ずつに分けて行った。

- 3) 内容：中学・高校で体験したことのある種目（バドミントン，卓球）と，体験したことのない種目（ゴルフ，ふうせんバレーボール）を短時間ごとに行い，体験の有無にかかわらず，基本スキルからゲームまで教員主導で授業を展開させた。
- 4) 配慮：どの種目も基本スキルを習得する工夫とゲームを楽しむプログラムの二段構成で展開をはかり，学生の興味が途切れぬように配慮した。チームや対戦相手も経験者や運動能力が高い者が同じチームにならないように教員主導で構成，組み合わせを行なった。

C．2006年以降の授業形態

- 1) 形態：授業記録（資料1）を導入し，教員主導型と記録の内容から学生のニーズ対応型を併用した授業
- 2) 種目：2005年度に設定したバラエティスポーツにフライングディスクを加え，各種目1～3回ずつに分けて行った。
- 3) 内容：授業で行う種目毎の歴史やルールの変遷について資料を整え説明した。授業記録を導入し，授業毎に学生の感想や意見を集約し，次回授業で活用することに努めた。
- 4) 配慮：①常に違ったメンバーやペアでチームを構成し，対戦も常に違う相手とできるように人的交流を工夫した。②各種目への理解を深め，審判もできるようにルールやマナーの説明を重視した。③授業毎に90分間で行う内容をホワイトボードに書き示した。④授業の最初にストレッチング体操を必ず行い，自宅でできる体操（貯筋，骨々，祝便，サザエさん体操など）を効果と共に紹介した。
- 5) 授業記録の内容と活用
- ①授業を通しての受講目標を記入させた。
 - ②過去のスポーツ歴を記入させた。
 - ③授業の初回に体力測定を行い，自己評価させて授業記録に記入させ，常に見返せるようにした。
 - ④授業毎にコミュニケーションのとれた学生の名前をフルネームで記入させた。
 - ⑤種目毎の基本技術獲得目標を達成させるためにスキルテストを設定し，合否や記録を記入させた。
 - ⑥授業毎の体調（良好： ，普通：○，やや不良： ，かなり不良：×）を記入させた。
 - ⑦授業毎の目標と振り返りを記入させた。
 - ⑧授業毎の身体活動充足度（過度： ，適度：○，やや不足： ，かなり不足：×）を記入させた。
 - ⑨授業の最終回に，授業を通しての受講成果を記入させた。
 - ⑩授業記録を添削し，必要に応じてコメントを書いて授業中にできなかった個別指導を行い，個別指導の内容を集約して，次回授業での全体指導に生かすよう心がけた。

3．学生による授業評価

本学の学生授業フィードバック質問票（共通質問項目用）（資料2）を授業の最終日に配布し，無記名でマークシートに回答させた。本質問票は質問項目が，授業に対する教員の取り組み，授業に対する学生自身の評価，授業に対する学生自身の取り組みについて学生が項目毎に5段階で回答

する形式になっている。また、マークシートの集計は学内の自己点検・評価委員会により行われ、質問項目ごとの平均値とそれをグラフ化したものが科目毎に返却され、その評価に基づいて今年度の反省と次年度への改善点についてコメントを記入したものが大学ホームページ上で公開されている。

4. データ集計

2004年度前期～2007年度後期までの筆者が担当する健康・スポーツ実技Ⅰを履修した学生を対象に、年度別前後期別に平均欠席者数、平均欠席率、未修得者数、未修得率、単位修得者数、単位修得率を算出した。また、授業評価は2004年度にも実施しているが、2005年度以降に質問項目が変更され、質問内容の整合性が取れないので、2004年度分は割愛して、2005～2007年度の授業評価を学生による教員の授業評価と学生自身による授業態度の評価に分け、前後期別に質問項目毎に得点の平均値を算出した。なお、授業評価は各期の最終授業時に実施するため、最終授業を欠席した者は含まれていない。

5. 授業記録のモニタリング

2007年度後期の健康・スポーツ実技の授業記録用紙中にある受講の成果に記載された内容をモニタリングし、学生にとって魅力ある授業と思えた語録、教員にとって価値ある授業と思えた語録、授業を通して学生に芽生えた行動や意識別に、キーワードを抽出した。

Ⅲ. 結 果

1. 授業記録導入前後における欠席および単位修得率

表1に授業記録導入前（2004～2005年度前後期）と導入後（2006年度前期～2007年度後期）の履修登録者、平均欠席者数、単位修得者数およびその割合、未修得者数およびその割合、授業回数を各年度、半期毎に示した。本学の授業回数は、2006年度以降半期15回の開講が義務付けられている。本学では1年生後期から健康スポーツ実技の履修が始まるため、基本的に後期が1年生、前期が2年生主体の構成となる。したがって、年度を跨いで履修する者の割合が圧倒的に多いものの、欠席

表1. 授業記録導入前後における欠席および単位修得率

授業記録	導入前				導入後			
	2004		2005		2006		2007	
開講期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
履修登録者数(人)	197	311	161	158	197	113	168	192
平均欠席者数(人)	16.4	32.8	14.5	21.0	20.9	7.2	13.3	15.9
平均欠席率(%)	8.3	10.5	9.0	13.3	10.6	6.4	7.9	8.3
単位修得者数(人)	191	303	158	145	191	101	155	171
単位修得率(%)	97.0	97.4	98.1	91.8	97.0	89.4	92.3	89.1
未修得者数(人)	6	8	3	13	6	12	13	21
未修得率(%)	3.0	2.6	1.9	8.2	3.0	10.6	7.7	10.9
授業回数	12～13回		14～15回		15回			

者は後期より前期で少なく、未修得者数も後期より前期で減少していた。授業記録導入と同時期に授業回数が15回となり、導入前より1～3回増えているが、平均欠席者はほとんど変わらなかった。しかし、単位未修得者数およびその割合は、授業記録導入後の方が若干増加傾向にあった。特に2007年度後期は、それまでは見学を出席扱いしていたが、特段体調不良とも思えない見学常習者が特定学科で目立ったため、欠席と見学の回数が15回中6回以上の者は単位修得を認めなかった。

2. 学生による教員の授業評価

表2に2005年度前期～2007年度後期における学生による教員の授業評価結果を示した。2004年度も授業評価は行っているが、2005年以降に質問内容が変わったため割愛した。評価は5.0満点であるが、授業記録導入後の2006年度以降も、導入前と変わらず全項目で4.0以上の高い評価を維持できた。特に導入前に低かった「教員の授業環境に対する配慮」も改善の兆しが見られた。

表2. 学生による教員の授業評価

授業記録 開講年度	導入前		導入後			
	2005		2006		2007	
質問項目	前期	後期	前期	後期	前期	後期
授業目的・内容のシラバスでの表示	4.4	4.6	4.7	4.5	4.6	4.8
教員の授業時間遵守	4.7	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9
教員の授業に対する熱意	4.7	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8
教員の授業準備	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	4.8
教員の話し方	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8
教材・機器・板書等の効果的使用	4.5	4.5	4.7	4.7	4.7	4.8
教員の説明	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9
教員の授業環境に対する配慮	4.1	4.3	4.4	4.3	4.6	4.6
授業への学生の興味・関心の喚起度	4.6	4.6	4.7	4.7	4.6	4.7
授業内容の分量	4.6	4.5	4.7	4.6	4.7	4.7
授業の難易度	4.6	4.5	4.7	4.6	4.7	4.7

3. 学生自身による受講態度の評価

表3に学生自身による授業態度の評価を示した。「授業受講前のシラバスの検討」、「授業の予習・

表3. 学生自身による授業態度の評価

授業記録 開講年度	導入前		導入後			
	2005		2006		2007	
質問項目	前期	後期	前期	後期	前期	後期
授業受講前のシラバスの検討	3.3	3.9	3.9	3.9	3.8	4.0
授業欠席回数	3.8	3.4	3.7	4.2	4.0	3.9
授業の予習・復習	2.6	3.0	3.0	2.9	3.4	3.3
授業でのレポート・課題等についての積極性	3.7	3.5	3.9	3.8	4.1	4.0
私語・携帯電話の自粛 教員・他者の発言傾聴	4.4	4.3	4.5	4.5	4.7	4.7

「復習」にはほとんど変化が見られないものの、「授業欠席回数」、「授業でのレポート・課題等についての積極性」、「私語・携帯電話の自粛、教員・他者の発言傾聴」では、授業記録導入前の2005年度より2006年度以降の方が改善傾向を示している。

4. 学生の授業記録における受講の成果から抽出できた語録

授業記録における受講の成果から、学生にとって魅力ある授業と思えた語録を抽出して表4に示した。魅力ある授業のキーワードとしては積極的な取り組み、喜びや楽しみ、コミュニケーションの広がりや深まり、貴重な体験や学び、苦手意識の克服といったものが抽出された。

表4. 学生にとって魅力ある授業と思えた語録

-
- ・積極的に何にでも取り組むことができた
 - ・楽しいからやる気も出て、だから成果が出た
 - ・活動的に動くことで気分も明るくなり、疲れも取れた
 - ・心身ともにこのスポーツを通して健康になれた
 - ・楽しみながら、理解しながら取り組めた
 - ・色んなスポーツを体験することができて良かった
 - ・苦手だったり初めてしたスポーツも大好きになれた
 - ・クラス全員と仲良くできた
 - ・知らない学科の学生と話せたのがうれしかった
 - ・スポーツを通して楽しくコミュニケーションがとれた
 - ・体力テストを通して自分の体力を知ることができた
 - ・授業でないとする機会のないようなスポーツを経験でき、貴重な時間だった
 - ・毎日体育があればもっと健康になれると思った
 - ・体育の授業は好きでなかったけれどこの授業で好きなことができた
 - ・苦手だと思っていたスポーツに挑戦できて好きなスポーツが増えた
-

表5. 教員にとって価値ある授業と思えた語録

-
- ・授業記録を振り返って達成感がわいた
 - ・スキル向上に一生懸命取り組めた
 - ・精神的に余裕を持って運動することを学んだ
 - ・スポーツはチームワークが大切だと学んだ
 - ・コミュニケーションをとる大事さも学べた
 - ・スポーツを通してたくさんの人と知り合えてうれしかった
 - ・日常でもできる体操を学んで参考になった
 - ・色々なスポーツのルールが学べた
 - ・意外と好きだと思えるスポーツに出会えた
 - ・色々な種目が経験できるのが楽しかった
 - ・スポーツをする楽しさを改めて実感した
 - ・今まで初めて体育でトップになれてうれしかった
 - ・楽しんでみようと思うスポーツが増えた
 - ・授業を通して周りの人と協力したり、思いやりの気持ちを持ってスポーツに取り組む姿勢が大切だと実感した
-

表5には授業記録における受講の成果から、教員にとって価値ある授業と思えた語録を抽出して示した。価値ある授業のキーワードとしては達成感、理解の深まり、学び、気づき、体感や実感、興味や関心の向上といったものが抽出された。

表6．授業を通して学生に芽生えた行動や意識

-
- ・体調を整えるようになった
 - ・授業以外でも運動するようになった
 - ・授業以外でも身体を動かしたい
 - ・これからもなるべく運動する事を心がけたい
 - ・これからも色々なスポーツにチャレンジしたい
 - ・これからもストレッチなどを続けて体力を維持したい
 - ・これからも身体を動かす習慣をつくり健康でいたい
-

表6には授業記録における受講の成果から、授業を通して学生に芽生えた行動や意識の語録を示した。授業以外での運動の実践、チャレンジ、体力維持や健康保持への欲求の高まりといったものが抽出された。

IV．考 察

学生による教員の授業評価は、予想に反して授業記録導入後の方が、全ての項目で改善傾向が見られた。授業評価だけではその理由はわからないが、授業記録への記述から、魅力、価値、挑戦といったキーワードに即した学生の感想を抽出することができた。さらに、学生自身の授業に対する取り組みも、授業記録導入前と比較して導入後に全ての項目において改善傾向を示していた。このことについても授業記録への記述から、あらかじめこちらで設定した種目毎のスキルテスト合格を目標にしたり、歴史やルールやマナーを学ぶことによって別の角度からそれぞれの種目への興味を深めたり、障害者の疑似体験（車椅子操作、ブラインドウォーク&ラン）や障害者スポーツを通して他者への配慮や健康体であることの幸福感を改めて感じるなど、筆者の意図したねらいに即した感想をもつ者が数多く見受けられた。また、シラバスの検討に関しても、高得点とは言えないものの、導入前に比較して、導入後の方が僅かながら上昇していた。本学の健康・スポーツ実技は、クラス制の種目選択制としているが、他の授業との兼ね合いで、種目選択の幅は狭く、自分のやりたい種目を履修するというよりは、時間割上履修の都合が良い種目を選択せざるを得ない状況にある。運動施設が体育館のみに限られ、授業を担当できる専任教員が2名であるため2単位のうちの1単位ずつを別の種目、別の担当者で受講できる時間割の配置を2006年度から意識的に行っている。今後、大学全体で電子シラバスの導入や授業で用いるホワイトボードに常にシラバスを掲示するなどの、学生のニーズに応じたサービスを加える事が必要かも知れない。

授業形態を転換して筆者自身の中で変化したことは、授業時間に隙間が無くなったということである。学生に授業毎に受講目標を記入させるために、筆者自身も1回の授業の中で学生に伝える1つ1つの説明に「習得して欲しいこと」を考え、そのためには「何をどう伝えればよいか？」を自身に問いながら授業の展開を心がけた。また、こちらが習得して欲しいことや達成して欲しいことができているかを確認するために、授業記録におけるスキルテストの達成度や振り返りを毎回添削した。そして、授業時間にできなかったことを授業記録にコメントすることによって個別指導を補

い、個別指導の内容を集約して次の授業の全体指導に活かし、常に学生のニーズに応じた授業展開への修正を試みた。毎時間ごとに行なうこの作業は、これまで結果でしか評価し得なかった学生の受講成果を経過でも評価することが可能となった。つまり、授業記録はどのテキストよりも筆者の教材づくりと授業展開の方向に的確な指示を与える賜物であり、学生の受講成果を経過も加えて評価できることが実感された。

一方、単位修得率は、授業記録導入後の方が低下していた。この理由は、授業記録導入前は、学生が出席したと主張する日数と、こちらが出席表に記入している日数に食い違いが生じ、学生との間で問題となったことがあった。しかし、授業記録導入以降、欠席した学生は授業記録への記入ができず、筆者も出席簿と授業記録の両方で出席確認ができるため、学生と教員間での出席日数の食い違いが解消された。また、授業記録では毎回その日の体調もチェックするので、体調の悪い学生への配慮も導入前より可能になった。したがって、学生が出席不足に不当な言い訳をできなくなったことが単位修得率の低下にいくらか影響しているのかも知れない。また、筆者が本学に着任した2004年度は12～13回程度であったが、2005年度に14回、2006年度以降は15回の開講が義務づけられ、半期間の授業回数が徐々に増えたことも影響しているものと思われる。しかしながら、学生便覧上は出席日数が授業回数の3分の2以上を満たしていれば評価対象になると明記してあるため、学生の中には3分の1までは欠席できると拡大解釈し、3分の2以上の出席を満たした後は連続して欠席するケースもしばしば見受けられる。講義等では欠席人数により授業への影響はほとんどないが、健康スポーツ実技の授業における欠席は、チームスポーツやペアを固定して連続で授業計画を立てている場合に、練習形態やチーム構成、対戦の組み合わせといったどの場面にも支障を来し、これらへの対応は授業中のロスタイムとなる。筆者が非常勤講師として勤務している近隣大学ではスポーツ演習の単位修得要件として、15回の授業中欠席は2回目までしか認められていないため、1クラスの担当ではあるが、出席率も単位修得率も例年ほぼ100%に近い。本学における健康スポーツ実技においても、学生の出席率と単位修得率を向上させるためには、健康スポーツ実技を手始めに出席にかかわる単位修得要件を整備し、ひいては既存の学生便覧の試験規定についての見直しについても言及していく必要がある。

授業記録には、「(ゴルフの授業で)先生にナイスショットと言われてうれしかった」、「教室での授業では話したことも無い人と同じチームになって初めて喋った」、「色んな人と対戦できて楽しかった」、「(卓球の)ゲームの前に先生が説明したにも関わらず、審判になった人がルールをいい加減にしか覚えていなかったため、ゲームが全く楽しめなかった」など、筆者が意外と思えることに学生が一喜一憂している様子が授業記録の分析から明らかになった。すなわち、授業では見逃しがちな学生の心情を授業記録で把握することができるし、この意外性の追及こそが、魅力、価値、挑戦を網羅した自己実現を促す体育授業の確立法を見出すカギとなるに違いないと思われた。

筆者が本学に着任した2004年度から2007年度までの健康スポーツ実技を振り返って、筆者にとって授業記録の導入は、「学生が満足する授業」を維持し、「教員も満足できる授業」への転換を図るのに有益な教材であった。また、学生自身の授業への取り組みの向上を促す教材の一つになりうる可能性も示唆された。さらに、これまで結果でしか学生の評価ができていなかったが、授業毎に授業記録の内容を見返すことによって学生の経過を評価できる可能性が示唆された。体育授業で多く取り上げられるスポーツはあくまで「素材」であって、学習成果を生み出すためには、これに教育

的な観点から加工・改変を施して「教材」へと作り替える作業が不可欠である。同様に、授業記録の導入は授業形態転換の必要条件ではあっても十分条件ではない。授業記録をどう活かすかは教員の力量によるし、スポーツという「素材」を「教材」に替えて授業に用いるように、授業記録という「素材」も学生と教員のよりよい「教材」となり得るように、教育的な観点から加工・改変を継続することが肝要と思われる。

まとめ

本研究では、健康スポーツ実技における授業形態の転換、具体的には学生に授業記録を導入する前と後での学生の授業に対する評価がどのように変化するかについて検討した。授業記録は、筆者が独自に作成したもので、最厚口の色用紙両面に15回分の授業記録欄を印刷し、授業毎に配布し回収した。授業記録の内容は、表面に受講目標、過去のスポーツ歴、基礎体力、コミュニケーションリスト、スキルテスト、裏面に授業毎の体調、目標、振り返り、身体活動充足度であった。授業記録には授業前後に10分程度の記入時間を要し、学生には重荷となり授業評価が下降すると予測した。しかしながら、授業記録導入前後で授業評価を比較すると、導入後の方が授業評価は全面的に向上し、導入前はなかなか改善が見られなかった「教員の授業環境に対する配慮」といった学生の教員に対する評価のみならず、学生自身の受講態度にかかわる評価も全面的に改善の兆しが伺えた。また、授業記録は授業毎の目標設定や目標達成度が学生自身にも把握でき、授業記録に教師が目を通すことで、授業内容の組み立てや補足、改善が容易になり、学生のニーズを察知しながら授業展開ができる可能性が示唆された。したがって、健康スポーツ実技における授業記録の導入は、「学生が満足する授業」を維持し、「教員も満足できる授業」への転換を図るのに有益であった上、学生自身の受講態度を改善するのに有用な手段の一つになりうる可能性が示唆された。

謝 辞

本研究は平成18・19年度科学研究費補助金 [基盤研究(B)] (研究課題番号 18300205) 「大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」(研究代表者：九州大学・橋本公雄教授) の助成を受けて行った。

参考文献

- 1) 根上 優 . 「魅力ある授業づくり」のための予備的考察, 体育・スポーツ教育研究 2(1), 38-39, 2002 .
- 2) 根上 優 . 「魅力ある授業づくり」その 知 のリアリティをめぐって, 体育・スポーツ教育研究 4(1), 28-32, 2003 .
- 3) 鈴木 理 . 大学体育における「魅力ある授業づくり」試論, 体育・スポーツ教育研究 6(1), 5-12, 2005 .
- 4) 杉山佳生 . 魅力ある授業, 価値ある授業 - 現代の若者の心身問題に如何にして応えるか - 若者の 体力 の問題から, 体育・スポーツ教育研究 7(1), 32-34, 2007 .
- 5) 廣田 彰 . 魅力ある授業, 価値ある授業 - 現代の若者の心身問題に如何にして応えるか - 若者の 心身 の問題から, 体育・スポーツ教育研究 7(1), 29-31, 2007 .
- 6) 根上 優 . 自己実現を促す体育授業モデルの構築をめざして, 大学体育90, 28-30, 2007 .
- 7) 柿山哲治 . 健康スポーツ実技における授業記録の導入と個別指導の試み, 大学体育90, 35-38 .

- 8) 柿山哲治．健康スポーツ実技（バラエティスポーツ）における授業記録の取り組み，第56回九州地区大学一般教育研究協議会議事録，109-116，2008．

資料1

2007年度 健康スポーツ実技Ⅰ（ 曜日， ・ 限目）
（種目：パラエティスポーツ，担当：柿山哲治）

学部	学科	学年	学籍番号	氏名	出身高校

スポーツ歴	小学校	中学校	高校	大学	実技Ⅰ

運動障害	
------	--

受講目標	
------	--

基礎体力（得点は1～10点，総合評価はA～Eを記入すること）

種目	握力	上体起こし	長座体前屈	立ち幅跳び	反復横とび	シャトルラン	総合評価	体力年齢
体力要素	筋力	筋持久力	柔軟性	瞬発力	敏捷性	全身持久力		
得点								

コミュニケーションリスト（回は授業の回数，氏名はフルネームで記入すること）

人	回	氏名	人	回	氏名	人	回	氏名	人	回	氏名
1			11			21			31		
2			12			22			32		
3			13			23			33		
4			14			24			34		
5			15			25			35		
6			16			26			36		
7			17			27			37		
8			18			28			38		
9			19			29			39		
10			20			30			40		

スキルテスト（記録に挑戦）

月日	種目	項目	判定	種目	項目	1回目	2回目	3回目
	体力テスト	測定評価	合・否	ソフトバレー	1人で15回	回	回	回
	ゴルフ	ハーフスイング	合・否	ソフトバレー	2人で30回	回	回	回
	ゴルフ	フルスイング	合・否	バドミントン	1人で20回	回	回	回
	風船バレー	車椅子操作	合・否	バドミントン	2人で50回	回	回	回
	授業評価	アンケート調査	合・否	卓球	2人で50回	回	回	回

受講の成果	
-------	--

授業毎の目標設定および受講成果のふりかえり（体調と充足度は下から選んで記入して下さい）

回	月 日	体調	目標（授業内容ごとに具体的に達成できそうな目標の設定）	充足度
			成果（目標の達成度，自己の心身への気づき，授業の感想，教師への意見など）	
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				

体 調： 「良好」，○「普通」， 「やや不良」，×「かなり不良」

充足度： 「過度」，○「適度」， 「やや不足」，×「かなり不足」

資料2

学生授業フィードバック質問票（共通質問項目用）

このアンケートは授業改善のために行なうものです。授業は教員と学生の共同作業です。教員はみなさんの意見を聞くことによって、よりよい授業を実現しようとしていますので、みなさんも率直かつ真摯な評価をすることによって、活水の授業づくりにご協力ください。回答内容があなたの成績評価に影響することは全くありませんので、以下の指示に従って、意見をお聞かせください。

回答は、すべてマークシート用紙に、質問番号に従って、鉛筆でマークしてください。上段の名前、月日、左端の年・クラス・番号・D、については、記入しないで下さい。

ただし、名前欄については担当者の指示がある場合はそれに従ってください。

はじめに、マークシート用紙1～3の欄に担当者から指示される3桁の数字を一桁ずつマークしてください。

ここから、それぞれ質問番号と同じ番号の欄に回答の番号をマークしてください。マークの仕方はマークシートの右端の例をみてください。

質問文の左端の番号と同じマークシートの欄に回答を記入する。

4. この科目は、以下のどれにあてはまりますか
 1. 共通教養・教養教育科目 2. 専門教育科目 3. その他（卒業単位にならない資格のための科目）
5. この科目は、以下のどれにあてはまりますか
 1. 自由に選択して選んだ科目 2. 何科目の中から選んで取らなければならない科目 3. 必修でとらなければならない科目
6. この欄には“1”をマークしてください。（共通質問項目用質問用紙）

ここまででマークシートの6の欄に記入しましたか？ずれていませんか？

次の7から23までの質問には、下の表の選択肢に従って1～5までの数字をマークしてください。

1	2	3	4	5
そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない

（Ⅰ．この授業に対する教員の取り組みについて）

7. 授業の目的や内容が、シラバスで十分に提示されていましたか。
 8. 授業は時間どおりに行なわれましたか。
 9. 授業に対する熱意が感じられましたか。
 10. 授業は十分に準備されていましたか。
 11. 教員の話し方は、明瞭で聞き取りやすかったですか。
 12. 教材（テキスト、配布資料等）・機器や板書は効果的に使用されていましたか。
 13. 教員はわかりやすく説明するように努めていましたか。
 14. 教員は学生の私語を注意するなど、授業環境に対する配慮をしましたか。

（Ⅱ．この授業に対するあなたの評価）

15. 授業はあなたの興味（関心）や意欲を引き出しましたか。
 16. 授業の内容の分量は適切でしたか。
 17. 授業の難易度は適切でしたか。

共通

(Ⅲ. この授業に対するあなたの取り組みについて)

18. 授業を受講することにした一番大きな理由はなんですか。

- ①授業内容に興味があった。 ②必修科目だった。 ③単位取得が簡単そうだった。
 ④友人がこの授業を受講した。 ⑤授業時間が都合がよかった。

19. 受講する前にシラバスをよく検討しましたか。

20. 授業をどのくらい欠席しましたか(20分以上の遅刻は欠席として考えてください)。

- ①0回 ②1回 ③2回 ④3回 ⑤4回以上

21. 授業を受けるにあたって、よく予習や復習をしましたか。

22. 授業でのレポートや課題などに、積極的にとりくみましたか。

23. 授業では、私語・携帯電話などの使用を慎み、教員や他の受講者の発言などをよく聴くようにつとめましたか。

ここまででマークシートの23の欄に記入しましたか？ ずれていませんか？
24から32まで空欄にし、何も記入しないようにしてください。

33 - 34. あなたの所属する学部・学科 2桁で記入して下さい。

01.	文学部 英語学科	02.	文学部 現代日本文化学科	03.	文学部 人間関係学科	04.	音楽学部 演奏学科
05.	音楽学部 応用音楽学科	06.	健康生活学部 食生活健康学科	07.	健康生活学部 生活デザイン学科	08.	健康生活学部 子ども学科

35. あなたの学年

1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生

ここまででマークシートの35の欄に記入しましたか？ ずれていませんか？

その他、この授業をよりよいものにするために、どんなことでも結構ですので、このマークシートの裏に、自由に意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。(自己点検・評価委員会)

(2009年1月28日受理)